

2020年7月20日号特集

(8月はお休みします)

一般社団法人 被曝と健康研究プロジェクト

<http://hibakutokenkou.net/>

14歳。爆心地約9キロの広島で原爆に遭い、かの地の祖父の病院で、被爆者の世話を手伝う被爆を詩に表し、女性史の研究、原爆の検閲を丹念に調査告発、90歳にしてなお、原爆、原発の被曝にとりくむ

いま、

ほりばきよこ

堀場清子

という生き方



逗子市時代、自宅書斎の堀場清子さん。2000年秋70代のころ（本人提供）神奈川新聞社 立石祐志氏撮影

堀場 清子さんの紹介にかえて

本誌編集責任 田代真人

堀場清子さんを知ったのは、今年3月ある日のことである。本誌「ヒバクと健康 LETTER」について、一本の電話がそれであった。63年初頭、私が広島での学生時代、アルバイトしていた地域に被爆当時の堀場さんが居住されていたという偶然もあり、たちまち共感するところとなった。5月12日、堀場さんとお会いした。数時間の懇談の後、「共感」は深い確信となった。

原爆から5年後、爆心地3キロで被爆した峠三吉は、「原爆詩集」を世に問うた。

その「あとがき」には、こう記している。

「今ではともすれば回想のかたちでしか思いえぬ時間の距りと社会的環境の変転をもった。だがこの回想は嘆きと諦めの色彩を帯びながらも、浮動してゆく生活のあけくれ、残された者たちの肩につみ重ねられてゆく重荷の中で常に新しい涙を加え、血のしたたりを増してゆく性質をもち、また原爆の極度に残虐な経験による恐怖と、それによって全く改変された戦争の意味するものに対する不安と洞察によって、涸れた涙が、凝りついた血が、ごつごつと肌の裏側につき当るような特殊な底深さをもつものとなっている。」

その、時代を見通す感性は、原爆の炸裂から5年後とは思えぬほどの鋭さである。

峠三吉の言う、その「底深さ」を、われわれは語り次ぎ、書き続けなければならぬ。

堀場清子について、矢島翠は、『堀場清子詩集』の解説の中で、「第一に強圧的な権力・権威に対する反抗の精神。反戦、反天皇制、フェミニズムの信念、そして人の目でなく自分の目で事実を見据えてやまない情熱」「第二に、その精神の持続性、一貫性においてきわだち、」「第三に、伝記、ルポルタージュ、女性史の記述における、徹底した事実の追及。」「第四に、繊細さと強靭さが釣り合った文体の緊張感。」を挙げた。全面的に同意する。あえてもう一つ挙げるとするなら、「時代を透徹する確かな目」ではなかろうか。

これから本誌で紹介する、堀場清子さんの「伝えられなかったヒロシマ・ナガサキ」は、明治学院大学国際平和研究所（高原孝生所長、国際学部教授）が発行している『南を考える 15』に掲載されたものである。高原所長が転載を快諾された。ここに心から感謝する。

高原所長は、堀場清子さん著作の「はじめに」のなかで、「禁止されるべきだった原水爆がなぜ戦後の長いあいだ増え続け、核兵器で武装した国々が今にも使うぞとかまえて脅し合っているのか。その一つの理由として、被爆した広島・長崎の惨状が、十分に世界に知らされてこなかった



ということ、あげなくてはなりません。日本の敗戦後、占領軍は、いわゆる『プレスコード』を布き、報道や出版物に対して検閲をおこないました。とくに神経をとがらせて抑圧されたのは、占領軍に批判的な内容が記されているもので、ささいな表現までチェックを受け、多くの記事や作品が発禁処分になっています。広島・長崎の破壊がどんなにひどいものであったか、生き残った被爆者たちがどれだけ悲惨な状況におかれているのか、メディアがとりあげて人々に知らせることが、このプレスコードによって禁圧・制限されたのでした。しかし、それでも、日本から世界へその事実を発信することは、他ならぬ日本人の手によって、もっともとなされなくてはいけなかったのではないか。それが、今につながる堀場さんの問題提起です。」

と述べ、広島の人・原民喜の作品「水ヲ下サイ」を紹介して、「広島・長崎の経験を受けとめ、伝えていくのは、日本に住む私たちが使命とすべきことではないでしょうか。」と締めくくっている。同感である。

堀場さんによると、自身の論考は、もともとイタリアの、ガンジー非暴力抵抗運動を継承する『サティアグラハ手帖』29号に掲載されたものとのこと。その雑誌から、長年イタリア在住の齋藤ゆかりさんが、“原爆特集”の監修を依頼され、齋藤ゆかりさんから堀場さんへ執筆を求める国際電話がかかったという。齋藤さんのイギリス人パートナーGerard Blaylock氏が、その“原爆特集”中のこの一編を、自発的にイタリア語から英語に翻訳された。和文と英文が揃ったので、齋藤さんと高原孝生氏との間で話が進み、和・英両文掲載の小冊子が発行されることになったという。日本・イタリア・イギリスをつなぐ、嬉しい平和運動の絆のたまものである。

堀場さんからは、本誌掲載にあたって、自ら作品を再校正し、今日のみで大幅な加筆修正をいただいた。編集者冥利に尽きることであり、深く感謝申し上げたい。なお、堀場さんへは、当時の無理解によると思われるが、「被爆者でもないのに」などの批判がましい言動もあったと聞いた。堀場さんには、「被爆者援護法」にもとづき、「被爆者健康手帳 区分第2号」が交付されていることも、この際記録しておく。

『南を考える』シリーズ問合せは、
〒108-8636 東京都港区白金台 1-2-37
明治学院国際平和研究所 ☎03-5421-5652
email:prime@prime.meijigakuin.ac.jp
HP:http://www.meijigakuin.ac.jp/~prime/
「メニュー」の「出版物」をクリックし、
「一覧」中の「南を考える」から「15号」
を選ぶ。冊子は英文の堀場作品も収録。
掲載のQRコードからも取得できる。



<日本語抄訳版の目次>

- 第一部 被爆証言：苦しみを整理し共有する
資料 8月6日の最大の犠牲者は、だれ？
1945年の広島
田中稔子 天井の穴の向こうに、青空が
堀場清子 花の季節
第二部 記憶、記録し、伝え、継承する
堀場清子 伝えられなかったヒロシマ・
ナガサキ
高原孝生 アメリカの若者たちを変える
ヒロシマ 体験
美帆シボ&ミシェル・シボ サダコの「つ
る」を、フランスの空へ
齋藤ゆかり 体験を「理性」の肥しに ~ 監
修を終えて ほか



伝えられなかったヒロシマ・ナガサキ

堀場 清子

記憶の中の「ピカドン」

1944年の夏から母、弟とともに縁故疎開していた私は、当時、14歳。広島市北郊、いまは市内の安佐郡緑井村で病院長をしていた祖父の医師用住宅で暮らしていた。その年の暮れに肺浸潤の診断を受けて女学校を休んでいたのも、あの朝は、弟と従弟が勤労奉仕で緑井国民学校へ登校した後も、母と節子叔母とまだ朝食の卓を囲んでいた。

突然、あたりいちめん、電灯のような黄色っぽい光が、閃いた。

私たちのいた緑井の家は、爆心地から北へ約9キロ、しかも茶の間は北西向きだったから、広島の人たちが「ピカドン」という、その「ピカ」も、間接的にしか見なかった。それでも経験にない、不可思議な閃光だった。

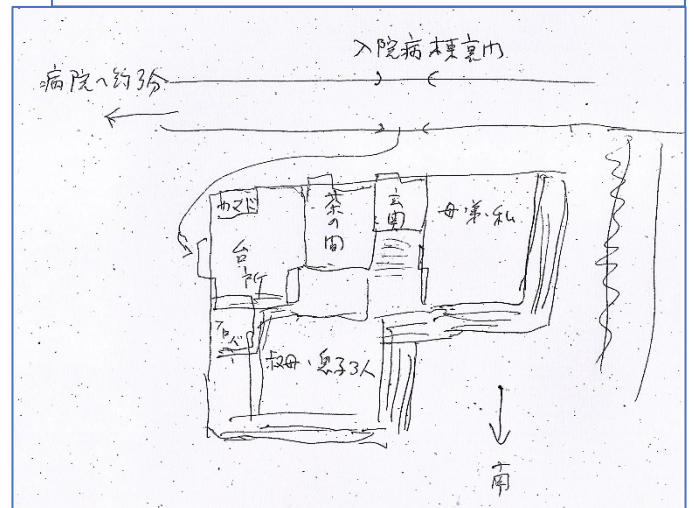
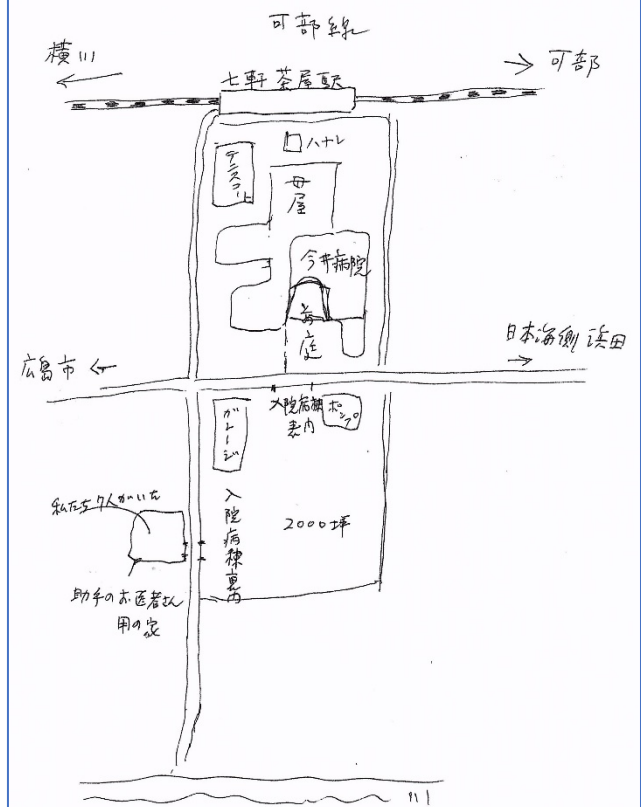
南向きの縁側に走り出してみると、広島市上空にあたる南の空いっぱいに、ピンク、紅、空色、紫、濃淡の五色の雲が、激しい勢いで湧きかえっていた。地獄とは、来迎図の外貌で訪れるものなのか、あの雲の下にいた人々を思えば痛ましくも、それは巨大な雲の花が際限もなく地から湧き、咲き誇る美しさだった。私は思わず叫んだ。

「あれなに？」

赤ちゃんだった従弟を抱いた母を最後に、全員が縁側で顔を並べた瞬間、「ドン」がきた。もともと、私には音を開いた記憶はない。ただ猛烈な衝撃が吹きつけて、とっさに節子叔母が赤ちゃん用に敷いてあった蒲団を曳いてきて、その下へ夢中でもぐりこんだ。一枚の掛け布団の中で、大小五人が揉みあっていたが、いつまでたっても、次の「ドン」は来ない。

おそろおそろ顔を出してみると、閉めてあった部分のガラス戸は、めちゃくちゃに砕け、障子は棧ごと吹き飛び、天井は、北の角が5センチぐらい吹き上げられていた。北向きの玄関の二枚の引き戸も、鍵の掛かっ

堀場さんが疎開していた広島市安佐郡緑井村（当時）の祖父の「今井病院」の間取りを描いてくれた。上が今井病院。下が堀場さんがいた、離れの家族部屋。



たまま V 字型に鴨居から外れて、爆風が逃げ道を作っていた。

やがて祖父の病院から連絡があり、母と私は手伝いに向かった。歩いて 3 分ほどの距離だが、途中、母が「あ、あれ！」と右上方を指さした。阿武山（約 600 メートル）の上を真っ白いパラシュートが 3 つ（注 1）、斜め等間隔に並んで滑るように北へ流れていく。その白さが、一点の雲もなく晴れ渡った空の青さを、いっそう濃く感じさせた。

（注 1）落下傘と原爆の、投下される瞬間を凝視していたのが、広島市の東方、いまの広島市安芸区中野町にあった中野探照灯台の、当直員や見張り員だった。呉海軍警備隊の「中野探照灯台広島爆撃目撃状況」に報告がある。

「先頭ノ一機右ニ旋回次デー・二秒後後ノ一機左ニ殆ド垂直旋回ト思ハル程ノ大角度（大傾斜ヲ伴フ）旋回ヲナシ機首ヲ下ゲツゝ南下（略）先頭機右旋回中落下傘降下三箇開クモ最初ノ一箇開カズ後続機旋回始メントスル瞬間閃光ヲ認メタリ」

北の空のパラシュートに気を取られたまま、私たちは歩いていった。あのとき南の空を振りかえれば、キノコ雲を見たかも知れない。もっとも、原爆など知らず、原爆とキノコ雲を結びつける概念も、まだ存在していなかったけれど。

病院には、負傷者を乗せた最初のトラックがつき、祖父が外科室で手術にあたっていた。看護婦さんたちの白衣の忙しい動きが、すりガラス越しに見え、控えの処置室に一步入ると、むっとくる血の匂いで息が詰まった。処置台や椅子にひしめく男たちは、20 人あまり。市の北辺にいて、ガラスで裂傷を負い、鮮血が白いシャツを袈裟がけに染めていた。

二台目のトラックからが、原子の火に焼かれた人々だった。

帽子をかぶっていた男たちは、線を引いたように、帽子におおわれた部分だけ頭髮が残り、下側はずりりと剥げていた。大きくはれ上がった真ん丸な白い顔に、黒い汚れがついていると見えて、近づけば黒く縮れたものが皮膚の名残り、白いのは脂肪層とわかるのだった。声帯も腫れたらしく、男が笛を吹くように甲高い声を出した。

祖父の残した「思い出の記」には、「祇園救護所では『重症患者は今井病院へ』との標語の下に頻りにトラック輸送を開始した」とあるから、重傷者が集中したのかもしれない。平時なら自力で歩けるはずのない重傷者が、ひきもきらず国道を歩いて逃げて来た。夜になり母と私は門前で高張提灯をつけて受付にあたった。誰もが折り目正しく、姓名と住所を告げ、その後へきまって同じ言葉を付け加えた。「直撃弾を受けました」。町名も方角も違う人々が、みんな「直撃弾」とは不可解だった。

このときすでに 60 歳を過ぎていた祖父は、6 日朝から、「昼食夕食も抜き、徹宵一睡もせずの大活動でも処置し尽せなかった。翌 7 日も大同小異」（「思い出の記」）。助手の医師も、レントゲン技師も、とうに招集され、6 月には最後の招集があつて、院長を継ぐ伯父までが、白髪が目立つ禿姿で軍医として入営した後だった。看護婦 6 人、付添婦 3 人と、祖父は手記中に“戦力”を数えているが、とにかく男手がなかった。メスを持つ手は祖父一人きり、治療の順番より、死の順番が先に来てしまうのを防ぎようもなかった。

私は手術の現場を一度も覗いていない。外科室のすりガラスの向こう側が、祖父と看護婦さんたちの持場、こちら側が、大家族のうち、乳飲子を抱えていなかった女たちの、下働きの場だった。と言っても、押しかける重傷者への対応だけで、きりきり舞いし、具体的には何をしていたか、はっきりと思い出せない。私がたまたま薬局にいたとき、麦藁帽子の少女が窓にきて、すがるように言った。

「父さんが、治療を受けて帰りましたが、高熱を出して苦しみよりも。先生に往診してもらわれんでし

ようか」

それは夢のような希望だった。まだ最初の治療を受けられない負傷者が、ばたばたと死んでゆくなかで、彼女自身百も承知のその事実を盾に、断るよりなかった。その段階で高熱を発した例は、おおかた希望がもてないのだった。少女は窓の鉄格子にしがみついた。

「では、せめて薬をください！ せめて、熱さましでも…」

目の前の棚に薬瓶は並んでいたが、私にはどれが熱さましか解らない。看護婦さんを捉まえようと試みるもうまくいかず、一縷^{いちろう}の希望を断ち切る役を果たすしかなかった。

半世紀以上たった今も、あの少女は夢の中で度々私を訪ねてきて、鉄格子を握っては泣き沈む。せめて私が、毒にならない薬を知っていたら、どんなに良かったか。メリケン粉でも砂糖でも、当時の貴重品の一掬^{すく}いが裁量できたら、どんなに良かったろう。知らぬふりで薬包みにして渡せば、死にゆく父・夫に、せめて熱さましは飲ませたと、家族の心情はのちのちまで、どれほどか救われたことだろうに。

「新型爆弾」の噂が流れてきたのは、7日の夕方ごろだった。あの時の、ゾッと身の毛のよだつ感覚が、忘れがたい。「原子爆弾」という呼び名を、いつ聞いたかは、記憶にない。ピカッときて、ドンで一切が壊滅したのだから、広島のにんげんにはあくまで「ピカドン」で、「原子爆弾」はよそよそしい言葉だった。

後年、泰子叔母がいった。「最初のトラックに、なぜか無傷の男の子が一人まじっていたのよね。10歳ぐらいの。その子が、着いてから間もなく、狂いまわるようにして死んでしまったの。その時、お祖父ちゃまが、これは新型爆弾じゃの、っていわれたのよ。さすがだなアと思ってね」

母や叔母たちと話し合ってみると、同じ場所、同じ状況の中にいながら、体験や記憶がそれぞれに違っている。まるで各自が、ジグソー・パズルの別々の一片を抱えこんでいるように。それほど、どの局面も切羽詰まり、混乱を極めていた。

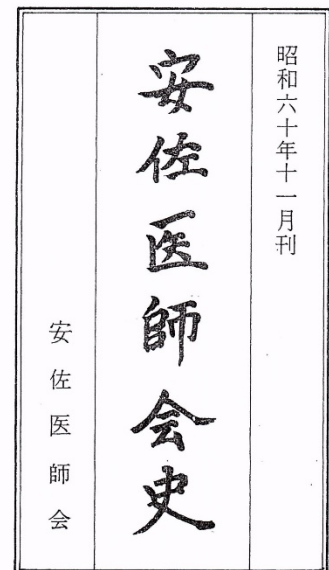
あの時、引き受けた負傷者は、いったい何人だったかと、後になって私たちは話し合ったが、これも意見はばらばらだった。『広島原爆戦災誌』第四巻第二編（広島市役所、1971年）によると、今井病院の収容者数が300人、死体処理数80人、とある。緑井国民学校に、負傷者収容所が開設されたのは、三日後。それまでは病院が、実質的な収容所だった。その後一ヵ月余りの間に「処置した被災者の延べ人数は、三千人にも達しただろう。（略）死亡診断書の写しによると、その間の死者は百五十五人の多きに達した」と、祖父の「思い出の記」に言う。

「ピカ」から3日目の夜、久しぶりの想いで、家に帰って食事をした。その時はじめて、自分の手が異臭を放っているのに気がついた。ただの死体の匂いとも違う。核分裂によって、生きながら内部崩壊させられた生物の、独特の腐臭だった。原子爆弾が、地球上に新しく生み出した、耐え難い悪の匂いだった。

そんな混乱のうちに、8月15日の敗戦がきた。その前日、一族の大人子ども、総勢12人が車を引いて山へ焚木を取りに行った。見晴らしのきく一本松で、私たちは息をのんだ。見えるはずのない広島湾が青く輝き、似島^{にのしま}が、安芸の小富士の別名にふさわしく、愛らしい三角形をやや傾かせていた。私たちと似島の間には、なんにも無かった。

かつて視界を妨げていた、ひとつの都市。軒の暗い古い店々が並んだ本通りや・・・いっさいがっさい、魔

地元の「安佐医師会史」には堀場さんの祖父・今井一氏の「思い出の記」がある



法にかかったように消え失せて、ただの平べったい拡がりに変わっていた。

その焼け跡から農村地帯まで、一面に林立しているものがあつた。林のように数もしれず、薄青い細い煙が、まっすぐに高く、高くのぼって、天へと溶け入っていた。人を焼く煙だった。11月はじめまでの死者「13万人前後」とされる、大量の死体処理には、河原に穴を掘り並べて焼くしかなかった。この夏の日々、魚を焼くような匂いが、いつも空気と混じりあっていた。生き残った人々は、苦く^{うなず}頷きあうのだった。

「人間も魚も、同じことよのォ」

当時の広島市は建物疎開の真っ最中で、周辺の農村にも勤労奉仕を強制され、一戸から一人は出ねばならなかった。投下前日の8月5日は緑井の番で、母と病院の伯母が解体された県庁庁舎の後片付けに行った。爆心から南々西へ800メートルほどの地点である。6日はより爆心地に近い中島新町で、隣村の191人が作業に就いた。本来は6日が緑井の番だったのを、その村の都合で交替したと聞く。結局、全員が亡くなり、一挙に75人の女性が夫を失って、「原爆未亡人村」の呼び名まで生まれた。

そして忘れもしない9月17日、のちに「枕崎台風」と呼ばれる猛烈な暴風雨が襲って、半壊の家々を倒し、山津波が大野陸軍病院もろとも、京都帝国大学の原子爆弾災害総合研究調査班を呑み、洪水は焼け跡も農村地帯もひとつづきの大湖水に化して、温品村に疎開した中国新聞社のたった一台の輪転機を水浸しとし、河原で焼かれた骨々や灰までを、残留放射能とともに一挙に海へと押し流したのだった。占領軍は、その後で放射能を測定し、それをもって被曝線量とした。(注2)

(注2) 週刊朝日緊急増刊『朝日ジャーナル/原発と人間』(2011年5月24日発売)掲載、矢ヶ崎克馬氏の論文「内部被曝隠しと安全神話/原爆被害の住民切り捨てを再現させてはならない」による。

「ヒロシマ」を語る

戦争は終わっても、厳しい食糧難に喘ぐ日々が続くなか、翌1946年の2月に私たちは、奇跡的に焼け残った東京の家へ戻った。そして、占領軍の支配下で、《自由と民主主義》の時代が始まった。なにかのはずみで友人たちに原爆体験を語ると、みんな目をみはって驚くのだった。戦時下の言論弾圧につづく、占領軍の検閲下で、原爆の実態はそれほど日本人に知られていなかった。誰もがひどくショックを受けた状態になって、終りには^{うめ}呻くように、必ず同じ言葉を口にした。「君は…そのことを、きちんと書いておくべきだ」

たしかに、あとで触れる『雅子^{たお}斃れず』の著者のように、私と同じ十代の半ばでも、その時点で優れた体験記を書いた人がいる。しかし、私は才とぼしく、しかも体験が直接的でなく、描くべき惨禍の巨大さに比して、表現の修練は皆無だった。散文よりも詩に書き留めたいと思いながら、自分の無力さを意識しつつ年月がすぎた。

広島「壊滅地帯」にあった進徳高女の教師、衣川^{ころもがわきよこ}舜子(1913-95)は、『夏の花』などで有名な原民喜(1905-51)と同じ^{のぼり}職町の自宅で被爆、自身も負傷しながら、救護所へ瀕死の生徒を捜し歩き、重症の原爆症となった。自らの体験記『ひろしま 原子爆弾の体験をめぐる』(丁子屋書店、1949年7月)を、原爆の実態を知ってほしいと、書留郵便で直接マッカーサーあてに贈呈した勇氣ある女性だ。そのはしがきには、こうある。「ふたたびこの地球上にこのようなあさましい実験が繰り返されぬことを、切に切に祈るものである。願わくは体験者全部が、何等かのかたちで記録をのこされたらよいと思う」。

これらの想いは、あの惨禍に遭遇した、文筆に関心ある人々すべてに共通の心情と思われる。

歴史的な惨禍を目の当たりにし、しかも生き残れば、大勢の死者から重いものを託される。

私がささやかな原爆の詩、6篇を含め、丸木俊子氏に題字と見返しの絵を頂いて、ようやく詩集『空』（冬至書房）を纏めたのは、1962年だった。さして反響もなかったが、仲間の女性詩人から思いがけない言葉をきいた。

「あなたは、被爆者じゃないから、原爆の詩を書いてもだめなのね」。

そのうち、「被爆者でもないのに、原爆の詩を書く資格があるのか」、といった声も伝わってきた。

またある評論家が原爆の詩を紹介して、私の作品も好意的に取り上げてくれたのだが、その中に「特権的」という言葉があった。自分は負傷せず、他人の悲惨を間近に見たことを指すらしかったが、その三文字を眺めながら、つくづく、考えこんでしまった。あれは「特権」というものだったのか、と。

それらは、被爆者から発せられた言葉ではなかった。が、原爆にかかわる表現に関して、被爆者でない詩人たちの間にさえ、一種の〈閉出しの力学〉が働いていると、感じさせるには充分だった。原爆の真実を描くことを使命とした作家大田洋子は、原爆の火傷で指の癒着した女性が、市電の中で車掌に切符を渡す困難さを描写したが、文壇はそれを「こしらえもの」と嘲って、急性原爆症の恐怖と闘いながら彼女が書いた連作を、〈原爆もの〉しか書けないとして貶めた。

私はその後も、原爆の思い出を書けと求められて、断ったことはない。しかし、地球上の生物の運命を決するこの主題について、学び、自己を深めてゆく道から、愚かにも、このとき撤退してしまった。

《プランゲ文庫》

そんな私をふたたび原爆に結びつけたのは、《プランゲ文庫》との出会いだった。

が、その前に、若い読者のためには、第二次世界大戦直後の日本の状況について若干の説明が必要だろう。

広島、長崎への原爆投下から間もない8月14日、連合軍による「日本の降伏要求の最終宣言(Proclamation Defining Terms for Japanese Surrender)」、通称ポツダム宣言の受諾の意向を伝えた日本は、翌15日の正午、ラジオによる玉音放送で国民に敗戦を報じた。9月2日、横須賀沖のアメリカ戦艦ミズーリ号上で降伏文書の調印式が行われる。このときから、サンフランシスコ平和条約発効の1952年4月28日までが、事実上の占領時代だった。大戦中、連合軍はドイツの場合と同様、米英ソ中国による日本本土の分割直接統治を計画していたが、最終案で日本政府を通じた間接統治の方針に変更され、地上戦を経てすでにアメリカの占領統治下に置かれていた沖縄を除く日本は、主権の一部を制限されつつも政府が存続する間接統治の占領下に入った。

日本の戦後《民主主義の時代》は、占領軍による《検閲の時代》でもあった。進駐当初から約4年間、占領軍は、電信電話・郵便などの通信手段、マスコミ、ミニコミのあらゆるメディアにわたって、徹底的な検閲制度を施した。言論を統制すると同時に、全国から情報を吸いあげ、効率的なシステムによって、必要な情報を占領軍内にゆき渡らせ、日本人の生活・思想・活動を、正確に把握していたと思われる。

この大事業を任務としたのが、1945年1月1日にフィリピンのレイテ島で正式設立された CCD (Civil Censorship Detachment) だった。その窓口になる検閲局は、第一地区では東京に、第二地区では大阪に、第三地区では福岡に置かれた。第四地区は、占領初期、ソウルにあったものが、やがて札幌に移されて、全国を四地区に区分することになった。

新聞の事前検閲は、9月8日から東京5紙で開始され、10月には大阪7紙、翌年5月に札幌へ波及。メディアを震撼させた最初の衝撃は、9月14日の同盟通信社に対する業務停止命令だった。さらに18日から

20 日にかけて東京朝日新聞が配信・発行停止命令を受けた。後者の発行停止の理由のひとつは、鳩山一郎（注3）が15日の紙上で原子爆弾の使用を「国際法違反、戦争犯罪」と語った点だった。

（注3）鳩山一郎(1883-1959)。東京出身の保守主義的政治家。1915年から国会議員。1954年から56年まで3期にわたり内閣総理大臣。

2009年から10年にかけて民主党政権の総理大臣を務めた由紀夫はその孫。

9月19日、検閲政策のバックボーンとなる十カ条の「日本新聞紙法」(Press Code for Japan)がSCAP（連合軍最高司令官総司令部）から発令、21日に公布された。CCDが同日発表したやはり十カ条の「日本出版法」(Code for Japan Press)は、ほぼ同内容で、それを運用したCCD自身、「プレスコード」を通称に使っている。「日本出版法」の十カ条は、以下の通り。

- 一、報道は、嚴重に真実に基づかねばならない。
- 二、直接にせよ、間接にせよ、公安を妨ぐるやうな記事を掲載してはならない。
- 三、連合国に就いての虚偽又は破壊的批評を掲載してはならない
- 四、連合国占領軍に就いて破壊的批評や、占領軍に対して不信、又は怨恨を招くやうな記事を掲載してはならない。
- 五、公式に発表されない限り、連合国軍隊の動静を掲載してはならない。
- 六、報道記事は事実を記し、記者の意見は少しも加えてはならない。
- 七、報道記事は宣伝価値を持たせる様に色づけてはならない。
- 八、さして重要でない報道記事を誇張したり、宣伝的意味をつけたりしてはならない。
- 九、報道記事は関係ある事実又は詳報を省略して、歪める様なことをしてはいけない。
- 十、新聞編輯へんしゅうに当つて、宣伝のためにする目的をもって必要以上に重要性を報道記事に附与してはならない。

雑誌の事前検閲は、9月19日に東京からはじまり、11月には福岡、翌年2月には大阪に及んだとされる。雑誌の場合は、一部の作品が発禁となっても、それを差し替えて再提出し、最終的にパスすれば発行できた。原爆作品にも、その他にも検閲者の赤エンピツで無慙むざんに消され、バツ印や「発禁」の文字で覆われた事例がたくさんある。1949年10月末日の深夜に、CCDが検閲作戦を終えるまでの約4年間、戦後の言論界を主導していた総合雑誌、検閲局のいわゆる「極右極左 28 誌」は、一貫して事前検閲に留められた。

また、本の検閲は、1945年10月21日に東京地域で開始され、次第に他地域へ及んだ。1947年10月15日までに「極右極左」14社を除くすべての出版社が、事後検閲に移行したが、それら14社は1948年9月1日まで事前検閲のまま置かれた。新聞・通信社についても1948年の夏にはすべてが事後検閲に移行している。

1947年末から、占領軍による検閲の任務の比重は、言論統制から情報収集へと移っていった。この一見検閲の緩みのようにも見える変化の背景には、米ソの冷戦や、朝鮮・中国と二つの社会主義国家の出現による、反共へ、逆コースへの占領政策の転換があり、事実、1949年秋のCCDの解散後も、プレスコードは生き残り、CCDよりもはるかに恐ろしい組織、CIC（Counter Intelligence Corps=対敵諜報支隊）によって、厳しい監視が続けられた。

ともあれ、CCDの解散を控えて、検閲局に山積した資料にアメリカ側の注目が集まり、その獲得にいくつかの大学が競った。結果的に、当時 SCAP の参謀部にいたメリーランド大学教授のゴードン・W・プランゲが有利で、メリーランド大学に決まった。《プランゲ文庫》とは、1950年に太平洋を渡った500余個の木箱に詰まった検閲資料のコレクションを指す。

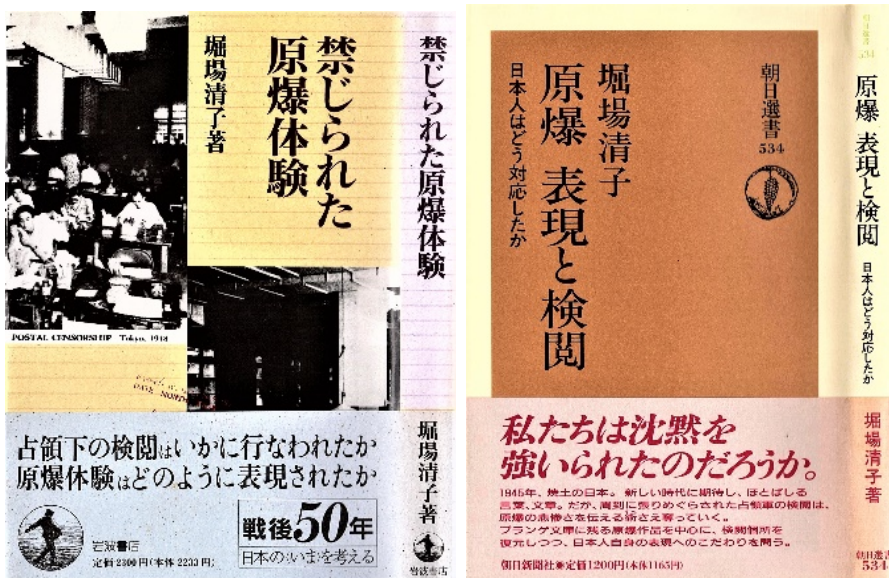
けれども、プランゲの資料は、その後ずっと同大学マッケルディン図書館の地下室に放置されていた。それが、1974年に渡米した奥泉栄三郎氏ら、日本人司書の献身的な努力により、同図書館内の《プランゲ文庫》として閲覧が可能になった。早い時期にそれを利用した作家江藤淳の調査報告を、私は熱心に読んだのを覚えている。したがって、1981年、夫で日本思想史家の鹿野政直がコロンビア大学客員研究員となり、ともにニューヨークで暮らすことになった時、《プランゲ文庫》を訪ねるのは、必然だった。原爆体験が私の原点である以上、「加害者の占領軍が、原爆作品をどう検閲したか、ギロギロ見てやろう」と心に決めていた。



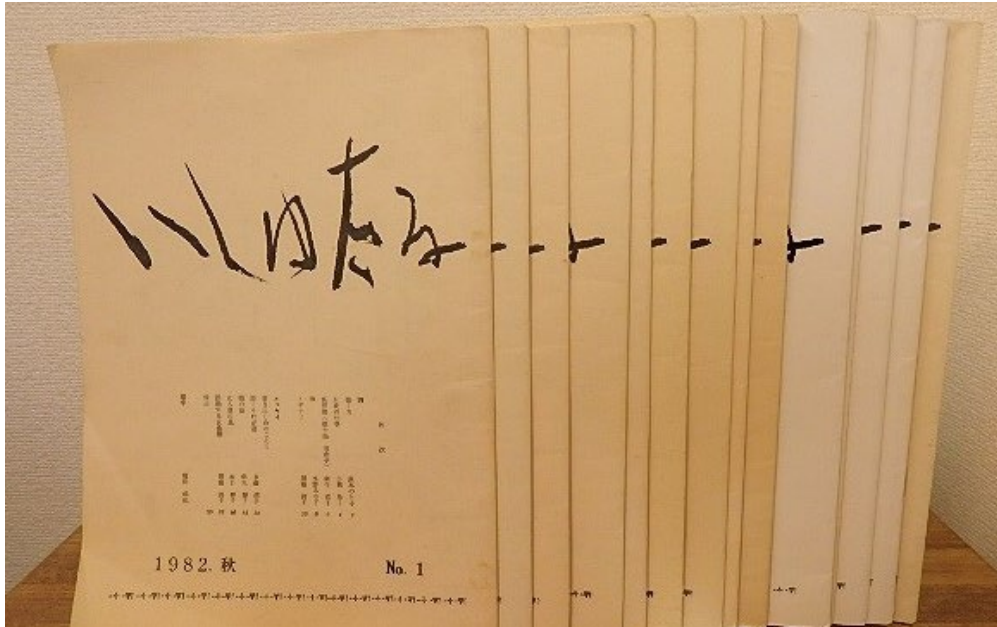
《プランゲ文庫》を収蔵するメリーランド大学のマッケルディン図書館

メリーランド大学は、メリーランド州の州立総合大学で、ワシントンD.C.からは郊外ほどの距離。地下鉄で簡単に通えるので、ワシントンD.C.に宿を取り、《プランゲ文庫》に通うしかない。何よりも、新聞1万6500タイトル、雑誌1万3000タイトル、図書と小冊子4万5000点というその規模に圧倒された。むろん数日の訪問では一端さえ見られず、翌年2月に改めて一か月の滞在を計画した。以来十余年、アメリカ滞在の前後一カ月は、ワシントンD.C.にアパートを借りて《プランゲ文庫》に日参する習慣になった。とはいえ、《プランゲ文庫》には、検閲処分の理由に関する索引が存在しない。“原爆でヤラレタ”事例を見つけ出すには、まず勘を働かせて、特定の新聞・雑誌・単行本等に狙いをつけ、後は1ページずつめくって発掘するしかない。一例ごとの発見に、おびただしい時間を要する。

さらにマッカーサー記念館や、スタンフォード大学のフーバー図書館などで日米の数多くの資料にあたり、原爆作品の検閲についてぼつぼつと調査を進めた。そして、『朝日ジャーナル』、『未来』のほか、自分



の主宰する雑誌『いしゅたる』に徐々に発表、「原爆五〇周年」の1995年には、それらを2冊の本に纏めて上梓することができた。『いしゅたる』の題字は、書家・篠田桃紅氏からいただいた。



禁じられた原爆体験

疎開から東京に戻ってみて、原爆の実態が日本人に知られていないのを目の当たりにしたことはすでに述べたが、それが検閲に関連するなど、当時は思ってもみなかった。あのころの私は、占領軍によって検閲された新聞・雑誌を日々読んでいるとは、夢にも考えないノンポリ学生だった。それでも、元軍人

で戦後は復員局に勤めていた父が、封書を受けとった時に、「やったな」と言いながら見入っていたことは覚えている。封筒の上部が切られ、検閲ずみと印刷した透明のセロテープで閉じられていた。

そして、検閲についての記事を発表しはじめると、その都度、私信を検閲された不快な思い出が、読者からの反響となって返ってきた。郵便の検閲に限られるのは、それだけが一般人の目に触れる検閲だったせいで、半世紀前の反発心を忘れず、機会があれば発言する、この一般的レベルの言論感覚には健康なものがある。ところが、メディアの検閲に関する反応となると、文章の発表にかかわるような知的エリートほど、なぜか解りにくくなることを、やがて思い知らされる。検閲「した側」の意図や活動と、「された側」の受け止め方や対応との、双方を合体させたところに、「検閲の実態」が現れてくるだろうと思い描いていたのは裏腹に、後者の日本人の側からの検証は難しく、水の流れるように万事を忘れ去る日本人の淡白さと、言論意識の希薄さ、さらに検閲局の指摘以上に自ら作品の削除をした例さえ、目の当たりにすることになる。

とはいえ検閲に抗し、初志を貫徹した実例も、挙げねばなるまい。先にも触れた大田洋子は、広島市内の白島九軒町で被爆し、壊れた家から脱出して火災を避け、全員が負傷した家族と共に、「太田川の下流」の河原で三日間野宿する。そこには負傷した大勢の人々と、死と生が行き交い、「この世のほかの絵巻」をみる。そこから始まった原爆体験の記録……『屍の街』を、障子から剥がした破れ紙などに鉛筆で書きつけ、年末までに中央公論社へ送った。だが厳しい検閲体制が待っていた。同社発行の『中央公論』は、CCDの作戦終了まで事前検閲に留め置かれた「極右・極左28誌」の一つ。大半の号が何か所もの削除や、ときに発禁処分も受けていた。単行本が発禁となれば、社にとってもダメージとなる。名編集者と呼ばれた長谷川鑛平氏は、慎重に時期を待ち、中央郵便局にあった検閲局で内閲をうけると、答えは“兎”だった。被爆の後、呉から20里も山奥の佐伯郡玖島（くじま）村に住んだ彼女を、米軍兵士と通訳の二世が尋ねてくる。短編「山上」に書かれた遣り取りから、双方ともその“非公式発禁”の状況を承知していたと受け取れる。

単行本が事後検閲に移行してから、一年をこえた1948年11月、『屍の街』は中央公論社から発行された。ただし長谷川氏の判断で、「無欲願望」の一章を削った。彼女はその章で、死傷者のデータや専門家の意見を援用し、原爆被害の実態……米軍の最も忌避する後遺症の恐怖と苦しみを訴えようとしていた。彼女にとっては肝心要の主張だった。当然にも、彼女は削除を納得せず、長谷川氏に激しい言葉を浴びせたらしい。

その出版から1年半後、彼女は削られた「無欲願望」を回復し、既刊の部分にも手を入れ、さらに三章を追加し、冬芽書房から重ねて『屍の街』を出す。執念の出版というほかない。その1950年5月はCCDの作戦終了後、すでに検閲制度が存在しなかったものの。



私は、『朝日ジャーナル』に美川きよ「あの日のこと」が掲載される際（左の図版参照）、解説を書くために長谷川鑛平氏に電話した。「いまになってみると、心配しすぎて悪かったかなアという、疚しい気がします」と言われた。だがそれは、1982年夏という時点での感想であろう。その37年前、敗戦・占領軍到着・プレスコード発令・CCDの検閲開始・『中央公論』へ次々通達される「削除」「発禁」処分が、踵を接して襲う中で、『屍の街』を受け取った長谷川氏の危機感にも、やはり同情を禁じ得ない。

それにしても、CCDは、具体的にいかなる種類の表現の流布を阻もうとしていたのか。

1947年4月21日から5月20日までの1か月間に、削除と発禁処分にしたカテゴリーの集計がある。

（国立国会図書館蔵、GHQ/SCAP文書から）

カテゴリー	国内で書かれた記事	国外から入った記事
連合国軍最高司令部批判	131	28
軍事裁判批判	1	0
SCAPの憲法作成への批判	5	1
検閲への言及	97	4
合衆国批判	100	126
ソ連批判	50	34
英国批判	16	31
朝鮮人批判	1	7

中国批判	4 2	0
その他の連合国への批判	4	7
連合国への全体的批判	1 1 0	2 2
満州における日本人取り扱いへの批判	1 0	1
連合国への戦前の政策への批判	1	8
第3次世界大戦の論評	1 2	0
左翼的宣伝	2 6	1 0
戦争宣伝の擁護	1 1	0
神国の宣伝	2 3	0
軍国主義的宣伝	2 3 0	1
国家主義的宣伝	1 6 6	1
封建思想の謳歌	3 7 8	0
大東亜の宣伝	1 0 8	1 4
一般的宣伝	2 3 3	5
戦犯の正当化あるいは擁護	7	0
占領軍兵士と被占領国の女の性的親密さ	3 0	0
闇市の活動	1 0	0
占領軍批判	5 6	2 0
食糧危機の誇張	6 9	0
暴力や社会不安の扇動	2 1 9	3

真実ならざる記述	226	20
連合国最高司令部（あるいは地方部隊への）真実ならざる言及	258	32
時期尚早の曝露	60	26
計	2690	401

日本ソブスコイ大尉・長崎・日本ソブスコイ大尉 (2014年6月)

「雅子斃れず」長崎原子爆弾記 石田雅子

長崎原子爆弾記 石田雅子

假刷 石田雅子

長崎原子爆弾記 石田雅子

民間検閲局第三地区検閲官
ソロブスコイ大尉陸軍少佐の意見
「当地区は、『雅子斃れず』という小説は、日本の公衆を害するであらうと、そして爆撃が人個性に対する犯罪であったと暗示すると、判断する。この本は疑いもなく人を動かし、歴史的な価値があるだけに、日本における出版は、もう少し延期されるべきである。戦争の傷跡を引き裂くことが、もっと少なくなり、敬意を再び燃え上がらせることも、少なくなるまで、この本を部分的に削除すれば、連統性をゆがめ、軍艦を損なう以上、当地区は、発禁処分が少なくとも当分の間は妥当と考える。」(一九四七年七月一六日)。
(『雅子斃れず』禁じられた原簿体験より)

解人タイムズ社 (1949年2月20日)。

表紙社 (1949年8月10日)。

「假刷」版 (1947年6月20日)。

ここでひとつだけあげる具体例、『雅子斃れず/長崎原子爆弾記』は、被爆当時14歳だった石田雅子が、みずみずしい少女の筆で、原爆の惨禍を活写した記録である。奥付に「昭和廿二年六月二十日」とあるこの本は、長崎地方裁判所長だった彼女の父・石田壽と、占領軍の長崎軍政部司令官だったビクター・デルノア

(Victor Delnore)陸軍中佐との親交を背景に、異例づくしの検閲過程を辿った。これは魅力的な作品であり、長崎についての叙述を加えるために取り上げるが、稀有の幸運に恵まれた例外的な存在であり、決して典型例ではないことを予め断わっておく必要がある。

まず、長崎軍政部の副官ロジャース(Captain Rogers)大尉が、司令官代理として、福岡検閲局司令官宛てに生原稿を送り、検閲局に一蹴される。事前検閲にはゲラ二通を提出する規則があるのを無視していたのだ。次いで、ロジャース大尉は、ゲラ二通をより上部機関の九州地区軍政部、CIE (Civil Information and Educational Section) 司令官宛に発送、第三地区検閲局司令官に回送される。地区検閲官ソロブスコイ(Captain Solovskoy) 陸軍少佐は、「この本は疑いもなく人を動かし、歴史的な価値があるだけに、日本における出版は、もう少し延期されるべきである」と記し、「発禁処分」とした。

石田家は、出版のために努力を傾けたらしく、名士から庶民にわたる人々に対し、この文によって「アメリカ又はアメリカ軍に反感を持つ」と思うか否かを、問いかけたアンケートも残されていた。軍政部と検閲局の綱引きの末に、表紙に「假刷」の判を押し、非売品として親族などへの個人的な配布を黙認するという、

類を見ない決着となった。

この情報を知った CCD 司令部の PPB (出版・演芸・放送課) 課長ジョン・J・コストロ(John J. Costello) が、激怒したらしいメモが残っていた。この人物は、1993 年 8 月 9 日の NHK スペシャルにも登場して、「あの件は軍政部の越権行為だ！」と真っ赤になって怒り、雄弁をふるった。「この本は反米感情を煽るから発禁なのだ。この本一冊を許可すれば、誰もが原爆の本を書いていいと考える。三大新聞も連日原爆の悲劇を書き立てることになってしまう。」

充分に生かされなかった犠牲

加害者の占領軍が原爆報道を抑圧するのは、自明だ。米国が初の原爆実験に成功した時点で、敵は非白人の国、日本だけで、人種差別が原爆投下の大前提だった。(戦後も列強各国は、自国から遠い太平洋の島々で、数多くの大気圏内や地下・水中での核実験を行い、非白人の島民多数を被爆させ、実験材料として利用した)。占領軍と同行の米国人学者は、日本人学者の研究成果を横領し、広島市内の比治山に ABCC (Atomic Bomb Casualty Commission 原爆障害調査委員会) を設けて、被爆者に長年の冷酷な〈調査〉を続け、治療は一切しなかった。

それに対して、原爆を落とされた側の日本の対応は、はたしてどうだったのか。

戦後の無念は数々あるが、なかでも一番の無念は、敗戦と占領軍到着との 11 日間の「ゆとり」(注 4) もしくは隙間にさえ、日本人の手にあった原爆情報が生かされず、国民の側も受け身の情報にのみ慣れて、能動的に知ろうとはせず、無知のまま占領期 7 年間の歳月を経過して、歴史の欠落を許した点にある。

(注 4) 1945 年 8 月 27 日午後、戦艦及び巡洋艦 17 隻の連合軍先発隊が、相模湾に入る。28 日朝、米先遣隊空輸部隊が、厚木飛行場に到着。30 日午後、連合軍最高司令官マッカーサー元帥が、厚木飛行場に到着。

あの 11 日間には、同盟通信社の対外無線も、日本放送協会の国際放送も、まだ生きていた。中立国との外電の窓も開いていた。朝日新聞社では、二つの被爆地の中間に位置し、小倉にあった西部本社がもっとも健闘したのに比して、東京本社は後々まで被爆者に対して非常に冷たかった。大阪にいた各社のカメラマンや記者は、各種の調査団等に随行し、被爆直後に続々と広島に入り、凄惨な写真が多く残されていた。それらは、もちろん、被爆から数日間に写されたものだった。なぜなら、それらの重傷者は数日のうちに死んで、それ以後には写せるはずがなかったから。しかし、敗戦を迎える 15 日までは大本営や内務省の検閲が厳しく、「原子爆弾」と書くことさえも許されず、ましてそのような凄惨な写真が国民の目に届くすべはなかった。(注 5)

(注 5) 明治期以来の国内行政に絶大の権力をふるい、国民生活全般を監視してきた内務省は、連合軍への無条件降伏の後、占領軍が検閲を開始してもなお、明治期からの検閲を続けていた。9 月 27 日に、天皇が連合軍最高司令官マッカーサーを訪問し、二人の並んだ“国辱の写真”を載せた 29 日各紙朝刊(『東京新聞』のみ 28 日夕刊)を、内務省が発禁とした。写真発表を期待していた占領軍は、ひょっとして、この発禁により内務省の検閲継続に気付いたのではないのか。即日、発禁処分の取り消しを指示し、続いて戦時諸法令の廃止を指示し、これにより内務省の検閲制度がようやく終わりを告げた。こうした政治状況下では、国内での被爆者の凄惨な写真の発表など、望むべくもなかった。(10 月 6 日には新聞紙等掲載制限令の廃止が、10 月 15 日に治安維持法の廃止が、それぞれ公布されている)。

ここに掲げた写真は、発禁作品を差替えてパスした『女性公論』7月号(1946年)表紙(左端、右二つは同誌掲載予定だったが、



占領軍・民間検局により「発禁処分」とされた事前検閲ゲラ。「×印」「SUPPRESS」(出版禁止の意)が見える。左端の写真で、藤田嗣治画の女性の顔に見えるのが、パスを示す「CP印」。検閲局がこの印を押さねば如何なる出版も不可能だった。発禁とされた美川きよ「あの日のこと」

と」は、《プランゲ文庫》で奥泉栄三郎氏の紹介文を読み、発禁ゲラを閲覧させてもらった。中学三年生の一人息子が、学徒動員されていて被爆し、死に至る経緯を、姑(美川きよの母)に報告する手紙形式で書かれた作品の哀切さに、私は心を打たれた。

発禁ゲラのコピーをもらって帰国し、朝日新聞社の編集者らの協力で、「36年後に甦る幻の原爆文学」と表紙に銘打ち、『朝日ジャーナル』1982年8月6日号の巻頭に掲げられた(12ページの図版参照)。ただしこれはいくつもの幸運が重なった例外であり、発禁処分を受けたまま、永久に喪われた作品がどれほどあったか、想像もつかない。

もしも、あの敗戦後の11日間に、各社、各支社に点在していた被爆者たちの画像を、報道陣が結束して、外信・外電の開いていた窓に一気に注ぎ込んでいたなら……。トルーマンの原爆投下声明で息を呑んでいた世界に、その凄惨な写真を流していれば、全世界が「核の悲惨さ」を、「核と生命の共存しえない」真理を、ただちに認識しただろう。その行動は、人類最初の核攻撃を受けた日本人がなすべき「宿命」であり、バーチェットら、外国人特派員のスクープに待つまでもなく、日本の報道陣に与えられた人類的使命だった。だが、それは無念にも、果たされなかった。

ならば当時の新聞は、何を書いたか。ただ、ただ、「天皇尊し」の大合唱だった。その天皇は、「象徴天皇」として戦犯を擦り抜け、1947年9月には宮内庁御用掛寺崎英成を通じて、シーボルト連合最高司令官政治顧問に、沖縄の長期占領を提言する「天皇メッセージ」を伝える。アメリカによる沖縄(および諸島)の軍事占領は、25年から50年ないしそれ以上の貸与をする擬制の上になさるべき、といった内容だった。次なるソ連の脅威を見据えての保身と、将来にわたる天皇制存続への執念の深さが刻まれている。その天皇の肩越しに、天皇の名において死に追いやられた無数の人々の呻きが、飛沫となって降りかかる。アジア全域にわたる住民と、狩り出された兵士ら、空襲の絨毯爆撃に曝された幼児・女・老いたひとびと……。死屍累々

として大地と海底を埋める。

日本で唯一、熾烈な地上戦が展開した沖縄は、本土防衛の（突き詰めれば天皇防衛の）「捨て石」とされ、住民の三分の一が戦死した。辛くも生き残った人々にとって「島全体が捕虜収容所」だったと、国場幸太郎『沖縄の歩み』にいう。戦火で荒れ果てた土地に、米軍は金網を張り巡らし、飛行場・港湾・兵舎等々の広大な軍事基地を確保した。その占領状態の延長線上に、奴隷さながらのアメリカ軍政が続き、その状況を脱出したい痛切な希望が、日本復帰への世論に繋がる。1951年春「日本復帰促進期成会」が始めた著名運動は、三ヶ月で住民の72%に達した。日本と連合各国（48ヶ国）の間で結ばれた「サンフランシスコ平和条約」（注6）の際、日本復帰促進期成会は、サンフランシスコに集まった日本はじめ各国代表に、沖縄の民意を告げ、日本復帰の実現を要請した。

しかし顧みられず、本土のみの“独立”が実現する。（1972年5月15日の「沖縄返還」は、「核抜き・本土並み」を謳ったものの、米軍基地の70%を抱えたまま。沖縄の人々の希望とは、およそ裏腹な実態が現在もなお続く）。

（注6）1951年9月8日調印・1952年4月28日発効。

大反響起こした『アサヒグラフ』の原爆写真



占領状態を脱して初の8月6日。この日刊行の『朝日グラフ』は、「原爆被害の初公開」と銘打ち、あの、敗戦時に世界に流すべきだった凄惨な写真を掲載した。それらの写真を卓上に並べた編集会議は、全員が沈痛な思いに打ちひしがれ、長時間を要した。これまで、国民に見せた前例の無い凄惨な姿を、公開してよいものか、否か、と。

「このむごたらしさを余すところなく、世界の人々に見せてやりましょう！」。ついに編集長が最終決断を下した。刊行されるや、大反響が巻き起こり、海外へも送られて、70万部を売り上げた。しかしそれが、1945年の8月に流されていたなら、遥かに強烈な効果を生み、その後の核戦略・核軍拡競争、そして原発の発展への強いブレーキになり得ただろう。あの日の犠牲を生かし、地球上のすべての生命を滅亡の淵へ追いつめる道筋を遮断する絶好の機会を、逸してしまった。



両写真は Wikipedia から

強烈に意識に訴えるフィルムや、医学資料を略奪し、なまなましい記事や写真を闇に葬ったアメリカと日本。双方の権力の隠ぺいにまかせた7年の歳月が、被爆者側に回復しえないダメージを与えた。隠ぺい者たちの目的は、十分な効果をあげたといえる。まさに被爆者は、アメリカと日本の権力によって、二度殺されたのだ。

—了—

八月

堀場清子

八月は裂けている

すべての乳房 すべての脈うつ心臓の上に
がっしりくいこんだ爪痕の
めざめのようにひらくときだ

八月はきこえる月だ

朽ちはてた生命のこだまらが
ひとときわ高くよせてくる月だ

波のキララから
黄塵の煙るなかから
死の灰の 霏々の底から
魂鎮めのうた なりともよして
大地をしみじみとつつむ月だ

すべてのこころのひそかな入江に
くりかえし しぶく月だ

ひきさかれた空の下に
ながらえたものらはひざまずき
ひたとその声にききいる月だ

無限に裂けた爪痕を
祈りのようにみつめる月だ

堀場清子 ほりば きよこ

1930年広島県生まれ。1945年8月6日爆心地から約9キロ離れた疎開先で原爆に遭う。医師である祖父に従って被爆者介護に当たる。早稲田大学文学部卒業。共同通信社勤務を経て、詩作、評論活動に専念し現在に至る。1982年詩誌『いしゅたる』創刊・主宰。2010年第14回女性文化賞。

〔詩集〕

1956年『狐の眸』（昭森社）

1962年『空』（冬至書房）

1971年『ズボンにかんする長い物語』（昭森社）

1974年『じじい百態』（国文社）

1992年『堀場清子詩集』（土曜美術社出版販売）

1992年『首里』（いしゅたる社）1993年、第11回現代詩人賞

2003年『延年』（いしゅたる社）

2013年『堀場清子全詩集』（ドメス出版）

〔著書〕

1968年『アメリカの裏窓』（潮新書）

1977年『高群逸枝』（共著、朝日新聞社）

1978年『ストッキングで歩くとき』（編、たいまつ新書）

1979年 高群逸枝『娘巡礼記』（校訂、朝日選書、のち岩波文庫）

1981年『わが高群逸枝』上下（共著、朝日新聞社）

1986年『女たち 創造者たち』（未来社）

1986年『祖母・母・娘の時代』（共著、岩波ジュニア新書）

1988年『青鞥の時代—平塚らいてうと新しい女たち』（岩波新書）

1990年『イナグヤ ナナバチー沖縄女性史を探る』（ドメス出版）1990年、第5回青山なを賞

1991年『「青鞥」女性解放論集』（編、岩波文庫）

1995年『禁じられた原爆体験』（岩波書店）

1995年『原爆 表現と検閲—日本人はどう対応したか』（朝日選書）

1996年『女がヒロシマを語る』（共編、インパクト出版会）

1998年『習俗打破の女たち』（ドメス出版）

2001年『高群逸枝語録』（共編、岩波現代文庫）

2009年『高群逸枝の生涯 年譜と著作』（ドメス出版）

2013年『鱗片 ヒロシマとフクシマと』（ドメス出版）

2016年『沖縄 戦後史から問う』（共著 NPO 現代女性文化研究所）

振替用紙は「LETTER」ご購入に年1回、ご寄付にはご随意にお使いください

◆「LETTER」の内容についてのご意見は下記へお寄せください◆
一般社団法人 被曝と健康研究プロジェクト代表 田代真人 masa03to@gmail.com
〒325-0302 栃木県那須町高久丙 407-997 ☎0287-76-3601